

——どうして、こんなことになっちゃったんだろう。

ほんの数時間前まで理人と居酒屋でくだらない話をして笑っていたのに。ビールで頬がほんのり赤く染まって、彼の悪口まじりの冗談に軽く肩を小突いて……それだけのはずだった。

小さいころから、私と理人はずっと一緒にいた。

夏のプール帰りに自販機のアイスを半分こして食べたり、テスト前に眠い目をこすりながら夜通し問題集を解いたり。

大人になつてからも変わらずで、気づけば何度も二人で飲みに行つて酔い潰れたらどちらかの部屋に転がり込むのも、もはや恒例行事みたいになつていた。

——だけど、いつも不思議に思つていた。

理人は背が高くて、かつこいい。

肩幅も広くて、水泳で鍛えられた身体はどこからどう見ても逞しい。整った顔立ちは女の子に人気があつて、実際に告白されている場面も何度も見た。だけど理人が誰かと付き合つたなんて噂は、一度たりとも聞いたことがなかつた。私は勝手に「きっと理人は誰にも本氣にならないタイプなんだ」って思つていた。だから、彼がずっと私を好きでいたなんて——そんなこと、夢にも思わなかつた。

ただの世間話のつもりで「彼氏と旅行に行つてきたんだ」と口にした瞬間、理人の顔色がサッと変わつた。

笑つていた目が鋭く細められ、氷みたいな視線が私を射抜いた。

気がついたときには、もうホテルのベッドに押し倒されていた。

「お前……ふざけんなよ。ずっと俺のもんだと思つてたのに」
低く落とされた声が、耳の奥でぐらりと響く。

「えつ……理人……？」

あまりの豹変ぶりに、頭が追いつかない。

友達として積み重ねてきた時間が、一瞬で別の色に塗り替えられていく。
胸がぎゅっと締めつけられる。

下着のホックが無造作に引き剥がされ、ブラがあっけなく床に落ちる。
指先で乳首を捻られた瞬間、鋭い痛みが走った。

「ひつ……！ やつ……やめ……！」

思わず涙声になつて首を振るのに、理人は私の反応など一切意に介さない。

「……何が彼氏と旅行だ。俺の知らないところで、勝手に他の男に触られて……」

「やめてっ！ 理人、なんでっ……！」

理人の舌が乳首に吸い付いて、ざらざらした舌先が転がすように舐め回してくれる。

「ひああっ……！ やつ……いやあ……っ！」

快感に抗おうとすればするほど、身体の芯に熱がこもっていく。

パンティも容赦なく剥ぎ取られ空気に触れた秘部が恥ずかしさでびくんと震える。そこに指がズブリと押し込まれ、粘ついた水音が生々しく広がった。

「うそ……やつ……そんなの……！」

「ほんと腹立つ……お前、俺のことバカにしてたのか？ 好きでもねえくせに隣で笑つてたのかよ……」

「ち、違う……理人……つ、バカになんかしてないっ！ そんなふうに思つたこと一度もない……！」

いつもは気だるげに笑つていたはずが今は黙みたいな顔で私を見下ろしている。鋭い視線は逃げ場を与えてくれない。